史的唯物論の適合性（上）

――複合的な歴史観と史的唯物論――

小林彌六

一　史的唯物論の仮説性

この論稿で説こうとするのは史的唯物論の適合性はどのような意味あいのどのような範囲のものと認められるか、また世界史の法則性はどのようなかたちで捕捉され定式化されうるかということである。このような考察をする作業が必要だと考えられるのは、史的唯物論の研究と吟味が現在もなお、というよりは現在は殊更に需められていることにもとづく。史的唯物論が完成した歴史観と考えられることは今日ではさすがに少くなったといって良いであろうが、かつては永い間、これがマルクス主義の精髄――少くともその一つ――と見做されてきた。レーニンは「マルクス主義の三つの源泉と三つの構成部分」の中で「マルクスは哲学的唯物論を深化発展せしめ、それを最後まで徹底させた、すなわち彼は唯物論の自然認識を人間社会の認識に押し拡げた。学的思惟の最大の成果としてマルクスの史的唯物論が現れた[1]」と述べ、史的唯物論に「驚くべき完璧と整合をもつ科学的理論」と最大限の讃辞を捧げている。このような見方はその後も広く根強く定着した。マルクス主義とは何たるかを解するにあたって、史的唯物論はその枢

要な理論として扱われ、世界の思潮に対してもまた社会主義運動に対しても強力なインパクトを与えつづけたのであった。ちなみにソ連で一九五一年に刊行されたコンスタンチーノフ監修・ソ同盟科学院哲学研究所編『史的唯物論』は世界の数多の読者に親しまれ、筆者も学生時代に繙いた記憶があるが、そこには次のように記されている。「社会史を、そのいっさいの多面性と矛盾性のうちにとらえた、単一の合法則的な過程として認識する道をさししめし、現在を正しく理解し、将来を予見する可能性をあたえる理論である史的唯物論は、社会の発展、すなわちある社会体制から他の体制への移行を説明する、まとまった、整然とした科学的理論である」[2]。

史的唯物論は歴史の歩みを整然と説明できる理論でありマルクス主義の主柱である。それは完成した歴史理論であり、揺るぎない世界観であるというふうに述べられている。史的唯物論の正否、はたしてそれがいわれるように完成した理論であるかどうか、その完璧性が謳われるのはいかなる論拠にもとづくのであるかを正面から問い直す作業は、マルクス理論に拠る人々のあいだではなかなか手がけにくい事情があった。史的唯物論そのものが意識・認識・イデオロギー・理論などの人間の精神作用の反映性、階級性を説くのである。したがってこの根本命題をめぐる吟味・検証の試みは、たとえそれが純粋に科学的な正否の観点から進められるものであっても、党派的見地からの中傷・攻撃に遭遇する懸念が持たれた。そのような事情により科学的吟味が妨げられているにもかかわらず、この歴史観は当然の真理として扱われ[3]、それにより基礎づけられることによって社会主義の正当性と必然性は盤石であると主張されることが多かった。またマルクスが「ひとたびこれをえてからはわたくしの研究にとって導きの糸として役立った一般的結論[4]」と述べたことから、かつては史的唯物論が『資本論』に結晶したマルクスの経済学体系の「前提」であると位置づけられることが支配的な風潮ですらあった。というよりはこのような理解は大きな問題を残すものであるに

もかかわらず、今なお内外のマルクス理論の圏域に意外な程に強く根を張っている。

史的唯物論の評価はかつてこのように高く、現在でもまたさすがに手放しではないにせよ史的唯物論への冤れかかりが依然として広く見受けられる。ところが仔細に検討してみると残念ながら、この歴史観・命題はマルクスやエンゲルスによって疑う余地なく「整然」と論じられ根拠づけられているとはいいかねる。『資本論』のかたちで経済理論が体系的に説かれたのとは違い、史的唯物論は体系的に明確に説かれたとはいいがたい。さまざまな機会にいろいろなかたちで触れられたにとどまる。とはいえマルクスとエンゲルスがこの歴史観を非常に大切に思っていたことは間違いない。またこの歴史観を統一的な命題として構想し、説きかつ論証する努力が試みられていたことも確かなのである。

このような点を顧慮しつつも史的唯物論がどのような命題であるかを端的に知ろうとするなら、やはり周知の『経済学批判』「序説」の公式化によることが適当であろう。長くなるが念のために引いておこう。「人間は、その生活の社会的生産において、一定の、必然的な、かれらの意志から独立した諸関係を、とりむすぶ。この生産諸関係の総体は社会の経済的機構を形づくっており、これが現実の土台となって、そのうえに、法律的、政治的上部構造がそびえたち、また、一定の社会的意識諸形態は、その現実の土台に対している。物質的生活の生産様式は、社会的、政治的、精神的生活諸過程一般を制約する。人間の意識がその存在を規定するのではなくて、その発展がある段階にたつとすると、いままでそれがそのなかで動いてきた既存の生産諸関係、あるいはその法的表現にすぎない所有諸関係と矛盾するようになる。これらの諸関係は、生産諸力の発展諸形態からその桎梏へと一変する。このとき社会革命の時期がはじまるのである。経済的基礎の変化につれて、巨大な上部構造全体が、徐々にせよ急激にせよ、くつがえる。

……一つの社会構成は、すべての生産諸力がそのなかではもう発展の余地がないほどに発展しないうちは崩壊することはけっしてなく、また新しいより高度な生産諸関係は、その物質的な存在諸条件が古い社会の胎内で孵化しおわるまでは、古いものにとってかわることはけっしてない。……大ざっぱにいって、経済的社会構成が進歩してゆく段階として、アジア的、古代的、封建的、および近代ブルジョア的生産様式をあげることができる。ブルジョア的生産諸関係は、社会的生産過程の敵対的な、といっても個人的な敵対の意味ではなく、諸個人の社会的生活諸条件から生じてくる敵対という意味での敵対的な、形態の最後のものである。しかし、ブルジョア社会の胎内で発展しつつある生産諸力は、同時にこの敵対関係の解決のための物質的諸条件をもつくりだす、だからこの社会構成をもって、人間社会の前史はおわりをつげるのである。[5]」

社会の仕組みを下部構造とそれに規定される上部構造からなるものと捉え、生産力の発展を起動力にして上部構造をも含む社会構造の変化が起きると解する簡潔な論理の歴史観が説かれている。大変理解しやすく、また人々の心に訴えかける力も持っている。それだけに非常に大きな滲透力・影響力を持ったといえる。しかしここで注意しなければならないのは、この命題が何故に成立するかの論証がどのようになされているかである。十九世紀の四〇年代にマルクスとエンゲルスが協力して書いた『ドイツ・イデオロギー』でこの歴史観の論述が試みられていたことは良く知られている。しかしアジア的生産様式の明確な説明はなく、古代的生産様式との関係も明らかにされていない。また古代的生産様式から封建的生産様式への移行が生産力の発展を基軸にして行われたということが明快に説かれているとは考えられない。それぞれの時代の経済史的な説明はなされているが、経済的下部構造が政治的・社会的・文化的上部構造をいわばその反映形態として規定づけること、さらには生産力の発展を基軸にしてある社会形態から次の社

会形態への移行が行われるということが疑問の余地なく説かれているとは到底いえない。ヘーゲルは『歴史哲学』で「世界史とは、精神が本来もっているものの知識を精神自身で獲得して行く過程の叙述である」[6]という壮大な歴史観の構築を試みた。この命題を軸に、東洋の世界・ギリシャ・ローマの古典古代ひいては中世ゲルマンの世界から宗教改革・フランス革命に到る過程を説明しようとしている。この観念論的な歴史解釈の空想性を克服し現実的な人間生活にそくして歴史の法則性を発見しようとしたのが、当時まだ二十代の青年であったマルクスとエンゲルスであった。ヘーゲル歴史哲学の観念性が避けることのできない一面性・限界を早くも見抜いたのはさすがといえる。ただ史的唯物論は世界史の徹底的な研究によって導きだされた結論というよりは、「天上から地上へおりるドイツ哲学とはまったく反対に、ここでは地上から天上へのぼる」[7]というように、二人の頭脳のなかでヘーゲル歴史哲学を唯物論的に組み替えることによって生み出されたのが実情であったといえよう。マルクスとエンゲルスの頭脳の中で、唯物論的な歴史哲学の命題として組み立てられることによって唯物史観は誕生した。そのさいに歴史学の知識が用いられたとはいえ、アダム・スミスに代表されるイギリスの古典派経済学の経済史観的歴史観が主たる拠り所になっていた。このことは『ドイツ・イデオロギー』の叙述のなかに、「分業」の展開による生産諸力の発展に対応して諸個人相互の「交通」(Verkehr)が成立し、また所有の諸形態が発生・変転するというシェーマが見えつ隠れつ貫いていることにおいて物語られている。

ありていにいえば、史的唯物論は従来しばしば語られてきたように「完璧」な「科学的理論」として生み落とされたわけではない。古典派経済学を主たる拠り所にして主に近世・近代資本主義社会の歴史によりながら、ヘーゲル観念論・歴史哲学の唯物論的な組み替えの習作としていわばスケッチ風に画きだされたのである。この歴史観が疑問の余

地なく説かれているというのには程遠い状態であった。この原稿が鼠どもの批判にまかせられた理由の一つはこのことであったかもしれない。史的唯物論がマルクスとエンゲルスという若い天才たちの「直観的な着想」として生み出されたものであることはくれぐれも看過されてはならない。このことを奇妙に看過ないしは忘れていたことから、学問上も思想上も枚挙にいとまがないほどの混乱が百年以上にわたり世界的に起きてきていたともいえる。マルクス主義者は史的唯物論の科学性をやや盲目的に唱えつづけたし、批判者は対照的に史的唯物論の誤謬を説くことによってマルクス主義ひいては資本論体系に代表されるマルクス経済学の否定を結論するのに性急であることが多かった。史的唯物論を科学的・学問的に吟味する作業は史的唯物論が集める関心の大きさに比しては驚く程緩慢にしか進行しなかった。

もう二十年程前になるが筆者はマルクスの経済学・思想の成立過程を辿る著書『経済学批判体系の生成』（御茶の水書房）のなかで、「唯物史観の成立過程、『ドイツ・イデオロギー』の内容にそくしてみてもそれが経済学からの推論にほかならないことは明らかである」[8]とあえて記してみた。史的唯物論という歴史観の持つ社会的な意味が非常に大きいためにこのことを確認することが何にも増して重要であると判断されたからである。史的唯物論の吟味が内在的に活潑化することを望んでのことであったが、その後も史的唯物論の研究が盛んに行われたわりには、この肝要な点を確認したうえでの研究が余り進んでいないのは残念なことである。一例を挙げると精力的な研究をつづけてこられた林直道氏は『ド・イデ』で「前人未踏の科学的な歴史観・社会観」として史的唯物論が「成熟したかたち」で展開されたといわれる。この決定的な問題点の存在に全く気付かぬかのように古典的な天衣無縫の素振りをしておられる。マルクス主義にとって史的唯物論が大切な主柱と見做されてきたからといって、科学的な吟味・論議を避けて

「昔の名前で出ています」と使い古された発想で史的唯物論への讃歌を奏でても、それで「仮説」的に定立された史的唯物論の科学的信憑性が高まるというものではない。そのような公式主義的な弁護論の反復はかえって心ある人々を失望・落胆させる結果になりやすい。実相をはっきり自覚したうえで史的唯物論の有効範囲・適合性の有無を明確にする努力が必要なのではないだろうか。

このところ史的唯物論・物象化論などで際立った活潑ぶりを見せていられる広松渉氏についてみても、史的唯物論について驚く程に能弁ぶりを発揮されるわりには科学的に深い味わいのある論議をされないのはじつに残念である。マルクスがヘーゲル哲学を克服して史的唯物論・物象化論などを定立したことの意義を哲学的な素養をフルに発揮され情熱的に説かれる語り口には魅力を感じる人も多いのであろう。ところが氏のばあいにも史的唯物論がもともと科学的論証の手順をへて提起されたものではないという根本的な事実をほとんど省りみておられない。真摯な学風を感じさせることが多い氏にしてこの知的怠慢はどうしたことであろうか。この根本的な事実に目を瞠っていかに史的唯物論の「宣揚」に努められても、その明細な吟味・これをめぐる研究の質を高めるのには余り貢献しないのではなかろうか。その幾分か当世風の語り口で古風なままの史的唯物論の人気の下降を食い止めるのにいささか尽力されるに過ぎないという実り少い結果に終らわねばよいのであるが。(9)

(1) 大塚　弘訳レーニン『カール・マルクス』
(2) コンスタンチーノフ監修『史的唯物論』大月書店第一分冊
(3) 一例として、林直道『史的唯物論と経済学』（上）（下）大月書店
(4) 武田隆夫・遠藤湘吉・大内　力・加藤俊彦訳『経済学批判』岩波書店
(5) 同右

(6) 武市健人訳ヘーゲル『歴史哲学』(上) 岩波書店七頁
(7) 古在由重訳『ドイツ・イデオロギー』岩波書店三三頁
(8) 小林彌六『経済学批判体系の生成』御茶の水書房八一頁
(9) 広松　渉『マルクス主義の地平』勁草書房『唯物史観の原像』三一書房『唯物史観と国家論』論創社等。

二　史的唯物論実証の不成功

マルクスにとってたまたま定立された史的唯物論はさらに明確に規定さるべき命題・歴史観であったし、何よりもまた歴史研究とりわけ経済学研究によって論証さるべき課題として意識されていたはずである。その重要な想源がヘーゲル歴史学(より広くはヘーゲル哲学)とりわけ古典派経済学であっただけに、[1] 経済学研究をとおしてより精緻な史的唯物論の論証をはたしたいという希求が心のなかに炎となって燃えていたはずである。こうしてマルクスの経済学研究・経済学批判の営為は、史的唯物論を論証しかつまた、社会主義とは何たるかを発見しその必然性を説き明かそうとする熾烈な志向を絢いまぜにするかたちで進められることになった。レーニンが見事に解き明かしたように、ドイツ哲学・イギリス経済学・フランス社会主義の「三つの源泉」が経済学批判の事業のなかに注ぎ込まれるかたちになったのである。

したがってその営為の集大成ともいうべき『資本論』には、さまざまな部分で史的唯物論を説こうとする努力が行われている。第一巻第二三章資本主義的蓄積の一般法則では資本蓄積にともない資本の有機的構成が高度化することによって相対的過剰人口が累積し、窮乏化が法則的に進行すると説く。第三巻第十四章では利潤率の傾向的低落法則

を説く。また十五章「この法則の内的な諸矛盾の展開」では恐慌が反復されることを論じ、その点に資本主義的生産様式に特有の蓄積・生産力拡大の傾向にとって資本主義的生産様式自体が制約となっていることが示されていると説く。とりわけ第一巻の末尾近く、第七篇資本の蓄積過程の第七節「資本主義的蓄積の歴史的傾向」の記述はあまりにも有名である。

「資本主義的生産様式から生まれる資本主義的取得様式は、したがってまた資本主義的私有も、自分の労働にもとづく個人的な私有の第一の否定である。しかし、資本主義的生産は、一つの自然過程の必然性をもって、それ自身の否定を生みだす。それは否定の否定である。この否定は、私有を再建しはしないが、しかし、資本主義時代の成果を基礎とする個人的所有をつくりだす。すなわち、協業と土地の共有と労働そのものによって生産される生産手段の共有とを基礎とする個人的所有をつくりだすのである。[2]」

「否定の否定」によって資本主義が必然的に社会主義に移行するというのである。資本蓄積とともに資本の集中が不可避的に進み、少数の資本家による多数の資本家の収奪が進む。「この転化過程のいっさいの利益を横領し独占する大資本家の数が減ってゆくにつれて、貧困、抑圧、隷属、堕落、搾取はますます増大してゆくが、しかしまた絶えず膨張しながら資本主義的生産過程そのものの機構によって訓練され結合され組織される労働者階級の反抗もまた増大してゆく。資本独占は、それとともに開花しそれのもとで開花したこの生産様式の桎梏となる。生産手段の集中も労働の社会化も、それがその資本主義的な外皮とは調和できなくなる一点に到達する。そこで外皮は爆破される。資本主義的私有の最期を告げる鐘が鳴る。収奪者が収奪される。[3]」このような論述が永く社会主義への心情を鼓吹し資本主義の矛盾に喘ぐ人々にどんなに勇気を与えたであろうか。しかしそのことはこの理論が科学的に正しいことの証

明とはなりえない。ここでマルクスが行った推論（予言）はその後百年余の資本主義の歩みと大きな食い違いを見せている。「貧困、抑圧、隷属、堕落、搾取」は発達した資本主義国ではその後一本調子に進みはしなかった。むしろそれらは和らげられたといえる面が少くない。「資本独占」が進んだとはいえ・依然として競争は行われる。生産諸力の増大・技術の進歩、「労働の社会化」がめざましく進展したにもかかわらず、先進資本主義国での社会主義への移行は容易に起こらない。労働者階級はそのごく一部を除くとこの推論のように革命に繋る反抗にはなかなか立ち上がろうとしない。歴史の現実と大きくズレただけでなく理論的な推定としても上述の諸点に重なり合う種々の論点で精密さを欠く論理展開になっている点が多々ある。はっきりいって、その所論はこのような資本主義の運命を予言する論理としては余りにも荒削りに過ぎる。そこには経済学者マルクスではなく社会主義者マルクスの素顔が、くっきりと浮び上がっている。ザインではなくゾレンが、科学的理論ではなくイデオロギーが、余りにも色濃く影を落している。この点については宇野弘蔵がつとに鋭い疑問を投げかけているとおりである。これではかえってマルクスの意図に反し『資本論』が史的唯物論を論証するものとはなりにくくなる。前に挙げた利潤率の傾向的低落法則や窮乏化法則なども、整合的な論理と解するには欠陥が多いことが今日では常識化している。[5]

経済学批判・資本論体系の執筆という事業を成し遂げたにもかかわらず、マルクスは史的唯物論の論証に成功しなかった。マルクス自身がどう考えていたかは一応別にして客観的に判断すると、『ドイツ・イデオロギー』において提起された「仮説」としての史的唯物論はマルクスの意図に反してついに首尾よく論証されるに到らず終わったのである。すでに述べたとおり史的唯物論の命題が生みだされた秘密は次の点にある。ヘーゲルが唱える精神の自己運動としての世界史観にたいして、「すべての人間史の第一前提はもちろん生きた人間的個体の生存である」、「精神」で

はなく「物質的生活」こそ土台であるという認識にもとづき、生産力の発展こそが世界史の原動力となるのではないかという構想がマルクス・エンゲルスによって樹てられたのである。この構想は実証研究の成果として生みだされたのではない。ヘーゲル歴史哲学の哲学青年らしく思弁的な仕方での唯物論的な改作として、世界史解釈の新しい図式が生み落とされたのである。そこから、「世界史は東から西に向って進む。というのは、ヨーロッパこそ世界史の終結であり、アジアはその端初だからである[6]」というヘーゲルのヨーロッパ中心の世界史観もほとんどそのままに受け継がれる結果になったのである。「アジア的、古代的、封建的、および近代ブルジョア的生産様式」という世界史の把握も「東から西に」進むという発想をなぞらっている。シュペングラーの『西洋の没落』やトインビーの『歴史の研究』に象徴される歴史学その他の潮流によって、今日ではこのヨーロッパ中心史観の限界は誰れの目にも明瞭になってきている。

史的唯物論は元来が思弁的に画きだされた仮説ともいうべき命題であった。しかもマルクス・エンゲルスもその論証についに成功しなかった。『資本論』が対象外とする先資本主義の時代あるいはアジア・アフリカなどの歴史について確たる論証が、さらに困難なことはいうまでもない。そこでは資本主義社会とは比較にならぬ多様性・多元性が発見されるからであり、またその研究が包括的になりにくいのは資料の制約その他の事情から否定さるべくもないからである。

このことの確認・自覚は、史的唯物論という大命題をめぐりどうしても忘れられてはならない要件というべきである。ところがマルクス主義の潮流では内・外ともに永くこのことが自覚されなかった。それが「完璧」な「科学的理論」であるとされ、「すべての社会現象と、個々の国や諸民族全体の歴史とを研究する唯一の正しい科学的方法で

ある[7]」と信仰にも近い無批判的な教義化が進められてきた。このことが学問的・思想的にもまた政治的にも大きな混乱・不信の原因になってきたのである。歴史的現実と公式的・教義的な史的唯物論との間のギャップが到る処に顔を現わすのを避けることができないからである。

(1) 『ドイツ・イデオロギー』(一八四五〜四六年) 執筆に先立ち、マルクスはエンゲルスの『国民経済学批判大綱』に触発されてイギリス古典派経済学を中心に経済学の研究を熱心に行っている。『経済学ノート』(一八四四〜四五年)、『経済学・哲学草稿』などにその様子が示されている。そのさいに分業・交換・市場・商業・マニュファクチャー生産等と商品経済史観的に、さらには経済史的に歴史の発展を説くA・スミスの歴史観にも大きな影響を受けたといえる。青年時代のヘーゲルにもこれに似た事情がある。古典派経済学を学んだうえで彼のばあいは『歴史哲学』の観念論的に一元論的な歴史観の定立に進んでいった。これに対しマルクス・エンゲルスは古典派経済学の経済史的な歴史観に拠りながらヘーゲルの『歴史哲学』の観念論的な歴史観を批判し、史的唯物論による歴史観への組み替えの作業に傾注するようになっていったといえる。

(2) 『資本論』②大月書店、九九五頁

(3) 同右②九九五頁

(4) 宇野弘蔵「社会主義と経済学」『社会科学の根本問題』所収。

(5) たとえば宇野弘蔵『資本論に学ぶ』、大内　力『経済学大系』第二巻『経済原論』(上) 第三巻『経済原論』(下)。宇野旧原論・全書版原論でも利潤率傾向的低落の法則を記しているが、この法則が説かれる明確な根拠を欠くと判断される。

(6) ヘーゲル『歴史哲学』武市健人訳・岩波書店 (上) 二一八頁

(7) コンスタンチノフ『史的唯物論』ソヴエト研究者協会訳

三　史的唯物論の適合範囲

そこで残された道は資本主義社会をはじめとするさまざまな時代・地域の歴史・事実にそくして史的唯物論の命題

の検証を進めることである。だが、その定立の経緯からすると、研究が進捗すればするほど、この命題と歴史的事実との間に横たわる距離がハッキリ目につくようになるほかないであろう。史的唯物論がいう諸種の生産様式の継起的な展開が、ヨーロッパはともかくとして、アフリカ、アメリカ、アジアなどの諸地域のすべてにおいて起こるとはいえない。「古代的」あるいは「封建的」生産様式がないままに資本主義や社会主義に移行する地域もあるし、社会主義から資本主義に反転するところがあるかもしれない。またある社会形態から他の社会形態への移行がつねに既存の生産様式や法律的・政治的上部構造が生産力の発展に対する桎梏と転化したことにもとづいて起こるとはいえない。そのように解されない事例はいくらでも挙げることが可能であろう。ギリシャ・ローマの古代世界から中世への移行はそのような単純な図式では到底説明しきれないであろう。このばあいローマを舞台にしてこのような転換が起こったのではなく、ローマから中部・西部ヨーロッパに文明の中心は転換したのである。ローマ帝国それ自体が内的に封建社会に転換したとはなかなか規定できない。ローマ帝国の崩壊はゲルマン民族との接触その移動を抜きにしては考えられない。そうなると当時の政治的・社会的な諸要因が復雑に絡んでいることは明らかである。ゲルマン民族を移動にかりたてたフン族の西方への移動やローマ帝国の弱体化という要因もあるだろうし、後者も経済的要因だけでなく征服戦争その他対外戦争による疲弊や広大な帝国内部の異民族の統治の負担・内紛・市民の無関心など多様な原因による面がある。これらの諸事実をひたすらローマ帝国内部の生産諸力の発展と生産様式—典型例としてラティフンディウムでの奴隷制生産の桎梏化の反映形態とのみ解するのはやはり無理というほかないであろう。

史的唯物論を念頭に置くことによって世界史の諸側面での認識が進歩する——生産力・生産関係などの要因を中心にし経済構造の認識が深まり、さらにそれぞれの社会・時代のあり方にたいしてそれが与える影響について理解が深

まることは大きな意義がある――ことは明らかである。この面で史的唯物論の定立がもたらした功績は大きい。ちなみにヘーゲルの精神・意識を中心とする歴史観では、この点が大きく欠落してしまっている。とはいえ、史的唯物論の適合する範囲が現実の歴史・社会の動きのなかのある部分に限られていることはおそらく否定できまい。研究の蓄積が進むにつれていかなるばあいには史的唯物論の命題が当てはまるか、いかなるばあいには当てはまらないかがより明瞭になってくるほかはない。こういう事情をふまえてみると、この歴史観をめぐる論議はどのような方向に向うのが正しいだろうか。このばあいにはそれが当てはまり、このばあいにはそうではないという有効な範囲を明確にすることが大切であろう。したがって結果的には史的唯物論を万能の普遍的歴史観としてではなく、ある範囲で妥当性を有する歴史観として自覚することが正しい道ではないだろうか。

もう少し具体的にいおう。交換経済・商品経済は他の社会的諸関係・制度などからの自立性を持つ面がある。それがたまたまある範囲を超えて拡大する勢いを見せるときに、生じる経済活動における変動が、社会的・思想的・政治的な変動を惹き起す起動力となることがある。『ドイツ・イデオロギー』も説いているとおり、中世には都市と農村との分業、商業や手工業の発展がみられる。その末期にいたると商業はめざましく発展し、マニュファクチャーの発生と発展、世界商業の展開が起こり、このうねりはやがて機械制大工業を生みだし資本主義社会を成立させるに至る。商品経済のめざましい発展は宗教改革や啓蒙思想の抬頭、市民革命などの生起の「土台」になったと考えられよう。経済活動の発展・生産諸力の発展など下部構造に生じた変動が政治的・社会的・文化的な上部構造の変動を誘発した面があるといえよう。このように中世から資本主義社会への移行については、史的唯物論のシェーマがかなり当てはまりそうな事情があろう。のちに触れるとおり、資本主義が確立してから後の現在に至るまでの歩みのなかで

も、資本主義社会では下部構造としての経済活動がいちじるしく自律性を備えるようになることによって、その運動・変動が上部構造とされる諸要因にたいしてかなり大きな規定力を発揮することがある。ただし誤解のないように記せば、この時代でも、史的唯物論のシェーマ（公式どおりとすると）が百パーセント当てはまるわけではない。M・ウェーバーが強調するような宗教（プロテスタンティズム）――もっと広くいえば一神教としてのキリスト教――が資本主義の生成と確立にとって重要な役割を演じたことも否定されえない。[1] とすると下部構造の動きが上部構造によって影響を受けたことになり、下部構造がひたすら規定的であり、またつねに強く自律的に運動したというわけでもない。

いずれにせよ資本主義の生成・確立・発展の時期には、かなりの範囲で史的唯物論のシェーマが適合しそうである。この歴史観が資本主義の時代にヨーロッパにおいて経済学を有力な拠り所として生みだされたこととも、この事実は興味深い対応をなしている。ポラニーがいう経済が「社会に埋めこまれた状態（エンベッテッド）」[2]にある他の時代・他の社会形態においては史的唯物論はなかなか生じにくい歴史観であろうし、事実またそうだったわけである。古典古代では経済の発見自体が難事であったし、封建的支配とキリスト教が根強かった中世に史的唯物論が成立する余地はまずなかったといえる。インドや中国などのアジアの諸国、アフリカの諸地域、オーストラリア、メラネシア、アメリカなど地球上の大半の地域では、そのスタグナントな態様からもわかるとおり生産諸力の発展・経済活動の変遷が社会構造の継起的な変化の起動力になるということはなかった。この歴史観を生み出す土壌となりえたのは、しばしば指摘されるとおり、ヨーロッパという特定の地域のしかも近世以降・資本主義の時代に限られているのである。マルクス・エンゲルス流に考えれば、他の地域・他の時代ではこの歴史観がたまたま発見されなかったということになりそうであ

る。真相はやはりそうではあるまい。これらの大半のケースでは、史的唯物論のシェーマがそのままに適合する状態はごく少いというほかないのではあるまいか。

経済活動が人間の生活の基盤であるかぎりその状態・仕組み・生産諸力（生産手段・技術・生産方法）などに社会構造―政治・社会・文化などを含む――を規定する影響力があることはかなりの範囲で認められよう。狩猟・採集経済に比して牧蓄が行われるばあい、さらには農業革命によって一定の地域に人々が定住するようになるばあいには、社会構造に大きな差異が認められるようになることが多い。農業を中心にする社会では、地縁共同体が成立し、さらに国家による支配関係が重要な構造規定要因になることが多い。とはいえ社会・宗教・政治などのシステムが逆に経済構造さらには産業・技術などを規定することもある。経済活動が他のさまざまな社会システムから独立して営まれる自律的存在としてあり、生産諸力の何にも優る強い発展傾向が貫くというわけではない。F・リストの発展段階説が説くように、どの地域でも狩猟時代、牧畜時代、農業時代、農業・工業時代、農業・商業・工業時代というような順に産業が発展し生産諸力の発展が見られるとは限らない。ブッシュマンのように狩猟経済のまま留まるものもあるし、農業から狩猟・採集経済に移行する社会もある。

物質的生存条件の確保の不可欠性から生産諸力・産業・経済構造などが社会構造や、ある社会形態から他の社会形態への移行について大きな規定作用を有する面があることは認められよう。しかしながら上述のとおり、あらゆるばあいに史的唯物論の公式が説くような生産力・下部構造の第一義的な決定作用が認められるわけではない。特定の社会構造の成立にあたりあるいはその存続について、生産力や下部構造がつねに決定的な規定力を発揮するとは限らない。インド・中国などをはじめとしてアジア的生産様式が驚くほど長年月にわたって持続したことについては、共同

体的な慣行・規制・宗教・強大な専制君主制などの経済外的な諸要因の影響・規定力が非常に強く働いたことによる。古典古代のローマ時代から中世封建制への移行においては、ゲルマン民族の移動・ゲルマンの部族制・王制・政治的な封建制・ヨーロッパの自然条件などが強く関わっている。ローマ末期の奴隷使役によるラティフンディウム経営の衰退やコロヌス制がストレートに中世の封建制・農奴制に連結したわけではない。それらは一旦進入者によって破壊されその廃墟の上にやがて中世ゲルマンの封建制が姿を現わしてきたのである。(3)

(1) M・ウェーバー『プロテスタンティズムの倫理と資本主義の精神』(上)・(下) 梶山力・大塚久雄訳・岩波書店。「プロテスタンティズムの世俗的禁欲は、無頓着な所有の享楽に全力をあげて反対し、消費、ことに奢侈的消費を圧殺した。その反面、この禁欲は心理的効果として財の獲得を伝統主義的倫理の障害から解き放ち、利潤の追求を合法化するのみでなく、これを(上述した意味で)直接神の意志にそうものと考えることによって、その桎梏を破砕してしまった」(下)二二二頁)とウェーバーは論じている。なおM・ウェーバー『宗教社会学論選』(大塚久雄・生松敬三訳、みすず書房)を参照。

(2) K・ポラニー『経済の文明史』玉野井芳郎・平野健一郎訳、日本経済新聞社、一九〇頁。

(3) 『講座史的唯物論と現代世界史認識』青木書店の松木栄三稿「歴史における社会構成体の移行(1)——前近代」一五〇頁。M・ウェーバーの古代文化没落論『一般社会経済史要論』などの古代史・中世史研究も参考になるところが多い。

四　史的唯物論の論証の試みの限界

史的唯物論の命題を世界史の現実に照して吟味してみると、そのまま当てはまると解される範囲はやはり限られている。歴史の事実に忠実であればそう解するほかない。このことに対応するのであろうか、史的唯物論の正当性をそのまま主張する論者は、——一部にはまだみられるとはいえ——さすがに少くなっている。いきおい史的唯物論と事

実の間隙を埋める努力が需められる情況になっている。ということは、史的唯物論の命題（論理）を歴史的事実のあり方に適合するように改善することがもとめられていることになる。

近年、「アジア的、古代的、封建的、および近代ブルジョア的生産様式」という発展史観について、ヨーロッパ中心の単線的歴史観である点をめぐり見直しの気運が内外に拡っている。アジアにもアメリカにもこれとは違う発展のコースがあったことは疑う余地はない。世界の諸地域を単線的な発展のコースに封じ込めて把えようとするのは無理な試みであるというほかない。この反省をふまえて「この法則が世界史過程の総体についてのみ妥当する……」[1]といい換えてみても、ギリシャ・ローマの時代があったということは、その時期の世界がすべて「古典古代」の時代であったことを意味するものではない。同じ時期に中国は周・漢の時代、インドはマガダ国・マウリア朝等の時代だった。世界史の歩みはまだまだ統一された流れとはなっておらず、複線的な推移を辿りそれゆえにまた複合的な流れとして刻み込まれていたにすぎない。一口に世界史といっても、文字通りグローバルな諸地域が緊密な関係によって繋がれるようになり一体となって変動する傾向を濃く示すようになったのは、近世初頭の重商主義時代・世界商業（アジア――アメリカ――ヨーロッパを結ぶ三角貿易を重要な柱とする）の成立を序曲とする資本主義の時代になってからのことである。しかも資本主義が確立したいわゆる自由主義段階ないしは帝国主義段階に至っても、欧米の資本主義経済が根強く成立した諸国（英・独・米・仏のちに日本など限られた国）を除けば、他の広大な地域（新従属派流にいえば周辺＝ペリフェリー）は上記の中心部（センター）から発する動きに関わり連動する面を持つようになりはするけれど、他面では他の伝統的・自立的な運動の傾面を強く残す。中心部と一体的な動きを見せる面がありはするが、それも複合的な動きに止まる面があることは否定できない。第一次大戦後あるいは三〇年代の大恐慌期以降の現

代資本主義についてもある程度同じことがいえる。世界史の流れといってもこのような事情があるから、「世界史過程の総体」については史的唯物論の継起的発展法則がそのまま妥当するとは安易にいえないはずである。

世界史の歩みは単線的ではなく複合的な発展とみるのが正しいであろう。梅棹忠夫氏の生態史観もこの点を端的に反映する一例といえよう。乾燥地帯、中緯度温帯など自然の地域差からくる文明の違いとそれらの関係を重視するのであり教えられるところが多い。[2] ただし乾燥地帯だけが主張されるように暴力と破壊の源泉であるわけではなく、資本主義の時代になると資本主義化した中緯度温帯ヨーロッパや日本がその源泉になったのである。またこの地帯が封建時代をもち早く資本主義化したことについても、地理的・自然的な要因だけから説明できるわけではない。

史的唯物論を遵守しようとする側でも単線的な発展史観を克服する作業は進んでいる。山之内靖氏・淡路憲治氏・らの仕事は、マルクスの原典研究をつうじてマルクスにも単線的な史観ばかりではなく複合的な史観を容れうる面が含まれていたことを検証する方向を指向しているといえよう。[3] このこと自体史的唯物論を改善するのに大きな意味を持つとしてよかろうが、究極的に問われている問題は下部構造の上部構造に対する規定作用や、生産力の発展が決定的動力となって上部構造・生産様式の転換が生じると主張する史的唯物論の基本命題についてどのように評価するかということであろう。マルクスが他面で進めていたインド・中国・ロシア研究はこれらの地域の歴史がヨーロッパの古典古代や中世さらには資本主義時代の歩みと異なることを自ら認知させることになったであろう。さらにそれを延長すれば史的唯物論の基本命題を大幅に組み替える必要が生じたのではないかと思われる。これらの地域の歴史は継起的発展をめぐっては公式とは違い欠落もあろうし、ひいては諸種の歴史段階の成立あるいは段階間の順序の逆転も起こりえないことではない。また生産諸力の発展を基動力にして歴史の歩みを説明することは非常な困難に直面する

ことが多い。カスト制度やバラモン教などの伝統的な宗教によって強く束縛されたインドでは、生産諸力の根底的な発展がまず起こりそれが社会制度を変化させていくことは困難だった。これらさまざまな事実に直面してはなんとしても史的唯物論の基本命題が歴史の発展法則を的確に把握しているとは考えにくい。

よく引合いに出される一八八一年のヴェラ・ザスーリッチへの手紙(4)にしても、ロシアの農村共同体が社会主義的な「再生の支点」となりうることを示唆していはするが、史的唯物論の基本命題について再考の要があるとまでは述べていない。またこの時期にも『資本論』での史的唯物論の論証について検討が必要だと考えられるようになっていたと解される形跡はなさそうである。しかし正しい歴史観に少しでも接近するためには史的唯物論の核心部分――端的にいえば経済決定論――について綿密な検討を行うことが強くもとめられよう。史的唯物論という歴史観・世界観のもつ壮大なヴィジョン、人類史と人間解放の必然的理路を説く福音の論理は、たしかに永い間、世界の人々にとって心の支えとなりうるものだった。しかしながらそれが吟味を要する問題点を多く含むことが明瞭になったとすれば、そのまま放置するのは社会科学にとってゆるされてよいことではない。歴史の法則性を説き明かす歴史観はイデオロギーではなく、なによりもまず歴史の真理を開示するはずのものだからである。たまたま不正確な歴史観がそのまま政治運動の指導原理として用いられるようなことがあれば、その齎す弊害は極めて大きいことがある。資本主義から社会主義への移行は生産力の発展を基軸にするという史的唯物論の命題は、ロシア革命以来の社会主義建設の試みのなかに誤って工業化至上主義・成長率至上主義を紛れ込ませ官僚制的管理のはなはだしい肥大化を生みだす無視しえない誘因にもなったのである。(5)

史的唯物論の核心部分に立ち入ってその内的な論理の吟味をさらに進んでおこなうべきではなかろうか。前にも記

したようにわが国では今日まで、思いのほかにこのような本質的な議論がなおざりにされる傾向が強かったように感じられる。あるいは意識的に避けられてきたというほうが当たっているかもしれない。ここで付言しておきたい。このようなことを指摘するのはなんらかの主義・党派の価値判断とはまったく離れた科学的真理の次元での論議としてなのだということである。くれぐれも誤解のないことを望みたい。さらに進んでいえば、これまで史的唯物論・経済学の論議等に余りにも早くまた多く主義主張・階級性・党派性を尺度とする判断の尺度が混入し過ぎていたのではなかろうか。この事情は真理の探究をはなはだしく妨げる要素になり易いのである。

史的唯物論の精確な評価は結局のところ、価値判断を離れた科学的論理としてその論証が成り立つかどうかの吟味にかかっている。この点を鋭く探り当てることにもとづき試みられた貴重な論証の作業が宇野弘蔵によってなされていることを見逃すわけにいかない。氏においては正当にもこの歴史観が完成された歴史観ではなく一つの「仮説」として提示されたものに過ぎないことが強く自覚されていたのである。要点的にとらえるなら氏の主張は次の通りになろう。史的唯物論は資本主義社会を対象する経済学によって科学的に論証される。そこでまず原理論で達成される部分が注目される。原理論は資本主義社会が商品経済を基本原理にして、一つの自律的な社会として存在できることを明らかにする。それによって下部構造が上部構造とは独立して存在しうることが論証される。つぎに恐慌の周期的な反復によって資本――賃労働関係の組み替えが行われることが解明され、「同じ資本主義社会における生産力と生産関係との矛盾から新たなる生産関係としての、労働者と資本家との関係の展開を明らかにする……」[6]ことが明らかにされる。もちろんこのことは氏も強調されるように資本主義の没落・社会主義への移行の必然性を説くものではない。とはいえ原理論がこのような事柄を明らかにすることはたしかに意味がある。ただ原理論が純粋資本主義社会の論理

的認識であってみれば、そのことは直ちに資本主義社会の現実における経済的下部構造の上部構造に対する規定作用や社会主義社会への移行を明らかにするものではありえない。そこで宇野氏の経済学体系の段階論（『経済政策論』で提示された重商主義段階・自由主義段階・帝国主義段階）においては、羊毛工業・綿工業・重工業の生産力の展開に対し、商人資本・産業資本・株式資本の支配的資本が対応すると説かれる。生産力の発展に対しこのようなかたちで生産関係の変化が応じることが示される。さらにこのような経済過程の変化に重商主義政策・自由主義政策・帝国主義政策が対応すると説かれる。ここには経済的下部構造の動向により国家政策が規定されることが示される。さらに第一次大戦後は社会主義への移行期であると把握されている。

宇野氏の三段階論の経済学体系は結果として史的唯物論を論証するものになっていると解されているということは十分に注意されてよい。資本論体系の三段階論の体系への組み替えによって経済学が精緻化されることが、「唯物史観の科学的論証」を可能にすると宇野氏は了解していた。『資本論』を書いたマルクスには史的唯物論を論証しようという志向が強かった。宇野氏のばあいにはたしかにその指向はずっと後景に抑え込まれていたように見える。しかし三段階論による経済学体系によって史的唯物論の「科学的論証」がなされたかに考えられたことは、おそらく氏が自らの学問的営為の大きな成果としてひそかに自負しておられた点ではないかと推定される。[7]「経済学の原理論が純化されて、完結性をもった体系として確立され、それに対して資本主義の発生、発展、没落の各時期が段階論的に解明されるとき、初めて唯物史観の科学的基礎づけの道がひらかれる。」と氏は[8]記しておられる。

今は氏の経済学体系の細部にまで踏みこんで記すだけの紙幅のゆとりがない。その制約を自覚するなかでやや概括的に記するなら、上述のような点が明らかにされたことはマルクスの論証よりさらに進んだ大きな業績と評価でき

る。とはいえ経済学体系の物語りうる内容はおそらく生産力の発展が生産関係に対してあくまで規定的であるとか、下部構造が上部構造に対しひたすら規定的であるというような史的唯物論の公式に示される命題そのままでは有りえないであろう。経済政策といっても段階論で取り上げられていないものもあろうし、経済政策を考察するにしても、「法律的、政治的上部構造」・国家を中心にする政治過程や「社会的意識諸形態・政治的、精神的生活諸過程一般」が本格的に論じられているわけではない。経済政策にしてもつねに生産力・経済過程の反映形態として打ち出されていたとはいいきれない面がある。史的唯物論が論証されているとはいっても社会的経済活動・生産力の発展などがすべての社会的諸関係を究極的に規定する要素であり、すべてのものが発する「土台」であると論証されているわけではない。たしかに宇野氏の論じ方では経済学で史的唯物論が論証されるのだという側面が前面にせり出しているように思われる。またそれをこのまま受け取っている風潮が今なお強いようである。しかし客観的に評価するなら、氏によって明らかにされたのは資本主義の時代の歴史の流れのなかで経済活動・生産力などの規定作用が非常に大きいということにとどまるであろう。段階論で主たる考究の対象になる先進国はともかくとして他の諸国・諸地域の動きについては、経済活動がそれらのすべてのあり方・動きの究極の「土台」であるとは到底断じえない面がある。それでも経済学が普通対象にする資本主義の時代においては商品経済の自律性によって、経済的な諸要素が社会の動きに対して演じる役割は非常に大きいといってよい。したがってまた史的唯物論がこの時代に生まれ、経済学がその裏づけになりうるかにみえる面があるのである。とはいえそれも上述の範囲においてのことであろう。しかも資本主義以外の社会あるいは時代についてみるならすでにしばしば触れたとおり経済活動がそれ自体として営まれ存在することは非常に少く、経済活動が社会のあり方・変動に対してつねに規定的な役割を演じるとはいえない面が多々ある。宇野

氏は史的唯物論が経済学によって論証されることによって資本主義社会だけでなく他の社会についての論証の糸口もつかめるかのように考えておられる。だがこれは至難の業といわざるをえないであろう。

結局、確認しうることは資本主義の時代では格別に、また他の社会でも経済的要因――ポラニーのいう「サブスタンティヴな意味での経済」――の規定力がかなり大きいということにとどまるのではなかろうか。そうであれば歴史の法則性はむしろ史的唯物論とは異なる枠組みによってはじめて捕捉可能と考えられるはずであろう。

(1) 『史的唯物論と現代』三一一頁阪東宏稿「世界史認識の理論」
(2) 梅棹忠夫『文明の生態史観』中央公論社
(3) 山之内靖『マルクス・エンゲルスの世界史像』未来社、淡路憲治『マルクスの後進国革命像』
(4) 『マルクス・エンゲルス全集』大月書店・第三十五巻一三六―一三七頁
(5) 既成社会主義が官僚主義的なねじれを起こしてしまったのは社会主義革命が遂行され、つづいて社会主義化が行われたときのさまざまな悪条件にもよるが、一つには社会主義の理論的な側面にも問題があったのである。既成社会主義の性格については、とりあえずP・M・スウィージー『革命後の社会』(TBS・ブリタニカ・伊藤誠訳)、小林彌六『資本主義と社会主義』(御茶の水書房)を参照。
(6) 宇野弘蔵『経済学方法論』一〇九頁
(7) 柴垣和夫「唯物史観と段階論」(『社会科学の論理』所収)は段階論で史的唯物論がいかに論証されうるかを論じようとしている。
(8) 宇野弘蔵『社会科学の根本問題』一二五頁

五　史的唯物論と複合的歴史観との関わり

史的唯物論の論証・実証の必要を直視するわれわれの研究は、その困難を自覚するという結論に近づいてきている。史的唯物論の適合する範囲があることは認められるのであるが、それが世界の歴史のすべてを一元的に説き尽す歴史観たりえないということが認知されるのである。繰り返えすことになるがこのことは史的唯物論の示す歴史法則へのアプローチをすべて無意味にするわけではない。上述のとおり経済的要因が社会のあり方・発展・変化に対して少からぬ重要性を持つことを示すものとしては活きるのである。

予定の紙数が残り少くなってしまったので、いささか先を急ぐかたちで記すほかないが、歴史の法則性を把握するには史的唯物論よりももっと大きなフレムワークを必要とするのではないか。人間（ヒト）が一個の有機体として生きる面においても集団を作って生きる面においても、その生存のなかに含まれる要素は種々ある。食・衣・住を確保するという面での経済活動も重要な要素であることは間違いない。人間は「生き」なければならないからである。「どの国民も、一年とはいわず二、三週間でも労働をやめれば死んでしまうのであろうということは、どんな子供でも知っています。また、種々の欲望量に対応する生産物量が社会的総労働の種々の量的に規定された量を必要とするということも、知っています[1]」とマルクスが説くとおりである。生きなければならないということは人間にとって絶対的な必要事である。このことをひたすら重視したところから、マルクス・エンゲルスの史的唯物論も誕生したといえる。エンゲルスは一八九〇年のブロッホ宛の手紙で「唯物論的歴史観によれば、歴史において最終的に規定的な要因は現実生活の生産と再生産である。それ以上のことをマルクスも私も今までに主張したことはありません。さて、も

しだれかがこれを歪曲して、経済的要因が唯一の規定的なものであるとするならば、さきの命題を中味のない、抽象的な、ばかげた空文句にかえることになります。経済状態は土台です。しかし上部構造のさまざまな諸要因——階級闘争の政治的諸形態と、闘争の諸結果——たたかいを勝ちとったのちに勝利した階級により確定される等の諸制度——法形態、はたまたこれら現実の諸闘争すべての、これに関与した者たちの頭脳への反映、すなわち政治的、法律的、哲学的諸理論、宗教的見解とその教義体系への発展が、歴史的な諸闘争の経過に作業をおよぼし、多くの場合に著しくその形態を規定するのです。それはこれらすべての要因の相互作用であり、そのなかで結局はすべての無数の偶然事（……）をつうじて、必然的なものとして経済的運動が貫徹するのです[2]」

公式的な史的唯物論に従えば、経済的要因が「唯一の規定的なもの」と考えられていることになろう。この時期のエンゲルスはさすがにこれには否定的であり、「すべての要因の相互作用」を積極的に認めている。エンゲルスが晩年にこのような見解を採るようになったのは察するに、青年期にマルクスとともに仮説的に定立した史的唯物論によっては総括しきれない数多の歴史的事実の存在を無視しえない心境になっていたからであろう。「唯一の規定的なもの」としての経済決定論を貫くためにはなんとしても無理な事情が多すぎる。「過度に経済的側面に比重をおくのには」彼自身やはり批判的とならざるをえなかったのであろう。

そこでわれわれとしてはこのエンゲルスの指摘をそのままで放置せず、そのなかに実質的に含まれるはずの事柄をさらに論理的につきつめていくことにしよう。政治的、法律的、哲学的などさまざまな要因は、唯一の規定因であるとみなされる経済的要因によってつねに規定されるもの・経済的要因の——「土台」と解される——反映形態であるとはいいきれないことになろう。同じことになるが、それらの諸要因はそれらのすべての属性が経済的要因に還元さ

れるものではないことが判明しよう。それらの要因はすべて経済的要因のあり方を反映して存在しある種の形態を採る・さらにすすんでいえば経済的要因を源泉として発生するとはいえないのである。それぞれの要因の多くがもともと経済的要因とは別個の独自の存在理由・発生の根拠があり生じ存在していることについて明確な自覚がなされなければならないであろう。一例を挙げてみよう。人間は食べなければ生きられず、その理由から経済活動は欠くことができない。しかし生きるということと殆んど同じ次元に、生殖活動を行い種の保存を行うという営みがあることも否定できない。それも生存が前提だという説も出てきそうである。しかしあるばあいには後者が前者を凌ぎ前面に出てくることもある。生存と生殖とはどちらが前提・「土台」でどちらが二次的な要因だとは一概にいえない面がある。生物学的にみてももともと生存は生殖を離れてありえないはずであり、生存と生殖とは本能に発しおおむね同じ次元に位する人間の営みであるといえよう。それゆえにまた生殖活動にともなう血縁集団の成立すんでは家族・親族の成立それにともなう諸関係・活動も経済活動と同じように根強い人間の営みであるということができよう。生存にまつわる経済活動・経済的要因があくまでも根元的・「土台」であり、生殖活動・血縁集団は経済活動（人間はまず生きなければならないということに結びつけられて、史的唯物論の公式的命題では、さまざまな他の要因に対して第一義的要因であり規定的要因であると位置づけられている）の仕組み・状態によってひたすら規定される側にあるとはなんとしてもいいがたい。生殖活動・血縁集団の営みがそれ自体として自律的に発生し存在する面があることは、歴史学やレヴィストロースに代表される文化人類学の数多の成果が明示している事実である。生殖・親族システムはしばしば・とりわけ未開社会においては人間の社会生活に対して大きな規制力を発揮する。「親族関係が、生産諸条件と資源への集団および個人のアクセスを規制し、婚姻を調整し、政治的＝祭式的活動の社会的枠組を提供し……」。M・

ゴドリエが述べるように、[3]親族関係が経済生活の仕組み・状態を規定する事実もさまざまな点で認められるのである。同じような事柄として宗教・信仰が経済活動のあり方に強く影響するばあいも多々ある。[4]

ところがエンゲルスは他方で、経済的要因が「最終的に規定的な要因」であるともいう。前述のとおりそれが「唯一の規定的なもの」であることは否定しているのであるから、彼がいわんとするところは他のさまざまな要因がすべて経済的要因から生まれるとか、その反映形態であるということではないであろう。さまざまな要因が存在しその「相互作用」があることを認めながらも、これらの要因のなかで究極的な規定力をもつのは経済的な要因であると考えられるというのであろう。エンゲルスの見方では他の要因が経済活動を強く規定する—経済活動が他の要因を規定するよりも強く——ことは考えられないことになる。こう主張することによって彼はミニマム、史的唯物論の立場を貫き守ろうとしているのであろう。「相互作用」を積極的に認め史的唯物論の諸命題に詳しく触れることを避け、その命題の輪郭をかなりぼかしたかたちにしている。その上で史的唯物論の究極のエッセンスを示すものとして上記のことを指摘しているのである。しかしエンゲルにとってこの命題だけは動かしがたい根拠があると考えられていたのであろう。「経済状態は土台です」が端的にその論拠とされる究極の事実であろう。

人間にとって生きることが他のすべてに先行するとすれば、一見この命題には疑問の余地がないようにも感じられる。だがすでに触れたとおり経済活動のあり方を他の要因が強く規制することもある。宗教的戒律が生産方法や生産手段の変化を強く抑制し、経済活動をいちじるしく停滞的にすることもある。ゲルマン民族の移動の例にみられるように侵略によって社会状態が一変することもある。経済的要因が最終的に規定的だといえそうでなかなかそういえない面がある。封建社会のように政治的な支配関係が経済関係のタイプを決定するばあいが非常に多いことも否定でき

ない。領主による封建的土地所有にもとづいて農民の剰余生産物・剰余労働の収奪がおこなわれるばあいにも、領主が農民をいわば経済外的に支配し土地をも管轄下に置くことが前提になっている。政治的な支配関係がまずあって経済的支配関係が成立する。両者のあいだに交互作用もおきるといってよかろうが、主たる規定関係は今述べたとおりであろう。封建的な経済制度が存在するということが「土台」になって封建的な政治制度が成立すると解するのは顚倒した不自然な理解であろう。経済的要因が最終的な規定要因であると考えられるのは「労働をやめれば死んでしまう」というように、経済が生きるための他の何にも先行する必要条件と考えられていることによろう。ただし生産力の水準がある程度以上にあがると、生存のためにぎりぎり必要な分量以上の生活資料が獲得される状態になる。そのばあいには、経済活動の全体がギリギリ生きるためになくてはならないものとはいえなくなるであろう。このばあい、経済活動の条件・あり方全体が生存の第一前提として他のすべての要因を究極的に強く規定するとはいえないであろう。経済自体の内部にもかなり自由度が高まるであろうし、それだけ経済全体としての規定作用は弱まると考えられるのである。

経済的要因が「最終的に規定的な要因」だということは、エンゲルスが考えていたらしいほどに自明の理ではない。経済的要因が重要であることは認められるにしても、そのことと最終的規定因であるということとは残念ながら全く別の事柄といわざるをえない。これまで記した事柄をもしわれわれが明確に自覚するなら個人・集団・社会の存在と運動を律する法則性を正確に把握するためには、それらがさまざまな要因の複合体として存在することを確認することから出直さなければならないことになろう。紙幅制限があるので、さらに踏み込んだ論述は次稿にゆずることにしたい。

(1) クーゲルマンへの手紙『資本論に関する手紙』(上) 岡崎次郎訳二二三頁
(2) 『マルクス・エンゲルス全集』大月書店第三十七巻四〇一—四〇二頁
(3) 山内 昶「未開社会と史的唯物論 (上) (中) (下)『思想』一九八二年五・六・七月号を参照。
(4) M・ウェーバー「世界宗教の経済倫理」大塚久雄・生松敬三訳『宗教社会学論選』に訳出・収録されている。

一九八三年六月三〇日